北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

杜甫「前殿中侍御史柳公紫微仙閣画太一天尊図文」訳注

メタデータ	言語:
	出版者:
	公開日: 2024-02-20
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 大橋, 賢一
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000115

杜甫「前殿中侍御史柳公紫微仙閣画太一天尊図文」訳注

大橋　賢一

【解題】

杜甫「前の殿中侍御史の柳公の紫微仙閣に画ける太一天尊図の文」は、前殿中侍御史の柳渉が紫微仙閣に、道教の神である太一天尊を描かせた「太一天尊図」について、架空の人物である石鼇老（石鼇に住まう老人）と道士らとの問答を通して、その構図や成り立ちなどを記した文章である。

この文章の制作年代について、仇兆鰲『杜詩詳注』巻二五は「篇中の干紀戦争の諸語を玩ぶに、当に是れ乾元の初め京より回りし後に作る所の者なるべし」と述べ、底本もこれに従う（本訳注で用いた底本及び参考にした注釈書については後述）。この見解に従うと、この文章は杜甫、四七歳ごろに作られたと考えられる。また「前殿中侍御史柳公紫微仙人閣画太一天尊図文」の文体名は、「文」と考えられる。明・徐師曾『文体明弁』（人民文学出版社、一九九八年）の「文」に関する序説が、

按編内所載、均謂之文。而此類獨以文名者、蓋文中之一體也。其格有散文、有韻語、或倣楚辭、或爲四六、或以盟神、或以諷人。其體不同、其用亦異。今並採而列之、以俟學者詳焉。

按ずるに編内に載する所、均しく之を文と謂う。而るに此の類独り文を以て名づくる者は、蓋し文中の一体ならん。其の格に散文有り、韻語有り、或は楚辞に倣い、或いは四六を為し、或いは以て神に盟し、或いは以て人を諷す。其の体同じからず、其の用も亦た異なる。今並びに採りて之を列べ、以て学者の焉を詳びらかにするを俟つ。

と記しているように、「文」の解釈は一定していない。ただ、柳宗元の別集、巻一八に「騷」に収められる一〇篇は、「乞巧文」のようにいずれも「某文」と記されていることから、唐人が騷体を「文」と称した可能性はある。杜甫のこの作品についても、問答体がとられていること、また「太一天尊図」をみて杜甫が想像を膨らませて天界を描いていることなどを踏まえると、これが「文」とされているのは、騷体が意識されたことによっているのかもしれない。同時代の批判を含み諷諫が意識されていることからも、騷体との関連性を見出すことができよう。とはいえ、どの文体にも当てはめることができなかったため、便宜的に「文」と記された可能性もあろう。「文」と称されている理由については、継続して考えていきたい。

「殿中侍御史」は、御史台の官名で、官位は従七品上。「柳公」は、作中に「柳渉」とその名が記されているが、その事跡は不詳である。「公」は、尊称。「紫微仙人閣」の「紫微」は、北斗七星の北にある星で、天帝の住まいを意味する（『晋書』巻一一、天文志「紫宮垣十五星あり、其の西蕃は七、東蕃八、北斗の北に在り。一に紫微と曰い、大帝の坐にして、天子の常に居るところなり」といった記述など）。つまり「紫微仙人閣」は、天人らが住んでいるかのような建物の美称と考えられる。その位置については、宋・宋敏求『長安志』巻一一（清・畢沅校訂本・宋元地方

志叢書一所収）に「太一観は県南六十里終南山の炭谷口に在り」とあることから、万年県の終南山炭谷口近辺にあったと考えられる。「太一天尊」は、北極星を神格化した神の名。『史記』巻二八、封禅書六に「天神の貴なる者は太一」とあり、この部分の司馬貞『索隠』は、『楽汁徴図』の記述である「天宮、紫微。北極、天一、太一」を引き、更に宋均の注「天一・太一、北極神の別名なり」を引く。

底本によれば、この文は全四段落に分けられる。以下、各段落の概略をまとめておこう。一段落では、石鼈老によって紫微仙閣に描かれた壁画が紹介される。二段落では、道士が壁画をみていた石鼈老に語りかける。三段落では、石鼈老の道士に対する意見が述べられ、四段落では、石鼈老の意見に返答できない道士が立ち去る姿が描かれている。

【訳注】

底本・校勘・訳注の体裁については、拙稿「杜甫「画馬讃訳注」」（『中国文化』第八〇号、二〇二二年）に従う。底本には蕭滌非主編『杜甫全集校注』を用い、校勘・訳注には『宋本杜工部詩集』（略称「宋本」）、元・高崇蘭『集千家註批点杜工部文集』（略称「高本」）、清・銭益箋注『杜工部集』（略称「銭本」）、清・朱鶴齢輯注『杜工部文集』（略称「朱本」）、清・張溍『読書堂杜工部文集註解』（略称「張本」）、清・仇兆鰲『杜詩詳注』（略称「仇本」）、『全唐文』、謝思煒『杜甫集校注』（上海古籍出版社、二〇一五年）の諸本を参照した。本文は原則として底本に従ったが、一部正字に改めたものがある。また、句読も改めたものがある。訓読・語釈では校勘を除き、新字体を用いた。以下杜甫の詩を引用するにあたっては、下定雅弘／松原朗編『杜甫全詩訳注』㈠～㈣（講談社学術文庫、二〇一六～七年）により、該書に記された詩の番号、及び『杜詩詳注』の巻数を示した。また、深澤一幸「杜甫における道教（下）」（『言語文化研究』一七号、一九九一年、以下深澤訳と略称）には、この文の書き下し、概要、並びに詳細な注釈が記されており、この訳注をまとめる際に多くの示唆を得た。

なお、本訳注は、筆者が二〇一九年一一月一七日、及び二〇二〇年二月一五日に杜甫散文研究会（於東京女子大学）で草稿を発表し、そこでの検討を経て修正を加えたものである。以下、底本に従い四段に分けて訳注を記す。

〔一〕

前殿中侍御史柳公紫微仙閣畫太一天尊圖文

石鼈老、放神乎始清之天、遊目乎浩劫之家、泠泠然馭乎風、熙熙然登乎臺。進而俯乎寒林、退而極乎延閣。見龍虎日月之君、亘乎疎梁、塞于高壁。骨者鬣者、皙者黝者、視遇之間、若寇厳敵者已。伊四司五帝天之徒、青節崇然、緑輿駢然。仙官洎鬼官、無央數衆。陽者近、陰者遠、俱浮空不定、目所向如一。蓋知北闕帝君之尊、端拱侍衛之内、於天上最貴矣。

前の殿中侍御史の柳公の紫微仙閣に画ける太一天尊図の文

石鼈老、神を始清の天に放ち、目を浩劫の家に遊ばせ、泠泠然として風に馭り、熙熙然として台に登る。進みては寒林に俯し、退きては延閣を極む。龍虎日月の君の、疎梁に亘り、高壁に塞がるを見る。骨なる者鬣ある者、皙き者黝き者、視遇の間に、寇の厳しく敵するが若き者なるのみ。伊の四司五帝天の徒は、青節崇然たり、緑輿駢然たり。仙官より鬼官に洎び、無央数の衆あり。陽は近く、陰は遠く、倶に空に浮びて定まらず、目の向う所は一なるが如し。蓋し知る北闕帝君の尊きこと、侍衛の内に端拱し、天上に於いて最も貴きことを。

以前殿中侍御史であった柳公が紫微仙閣に描かせた北極星の神「太一天尊図」をみて記した文

石鼇谷の年老いた住人は、心を天上界に解き放ち、永遠の時間が流れるこの仙人閣を思うがままに眺めている。ふわふわと軽やかに風をあやつり、うきうきと和やかで楽しげに仙人閣の高殿にのぼってゆく。歩みをすすめて葉を落とした林を見下ろし、歩みを戻して長い窓の廊下を歩きつくした。楼閣の龍君・虎君・日君・月君といった様々な神々が、間を広くとった梁に巡らされ、高い壁に敷き詰められているように描かれているのを目にする。神々の中には、骨張った者、鬚をたたえた者、色白な者、色黒な者がおり、一つ一つの顔をみていると外敵が激しくこちらに刃向かっているかのようである。また、かの四人の星神また五つの方角を支配する神々がおり、彼らの青々とした旗は高々とそびえ、その御車が連なっている。仙界に務める仙官も鬼官も、数え切れないほどここにいる。陽の神は手前に、陰の神が奥に描かれ、どの神々も空中に浮かんで一定していないが、だれもが太一天尊のほうをみている。こうした描かれ方から理解することができるだろう、太一天尊、つまり北闕帝君の尊さが、取り巻きの神々に対して姿勢を正されていることで示され、その存在が、天上において最も貴いものであるということが。

前殿中侍御史柳公…　「前」は銭曽本杜工部集（『杜集珍本文献集成・宗元巻』国家図書館出版社、二〇二一年）の巻目にない（なお刻本にはある）。宋本は「柳」を「仰」に作る。朱本・仇本は「太一」を「太乙」に作る。

石鼇老　石鼇という地に住む老人。「石鼇」は石の名。陝西省西安市南に位置する終南山のふもとにあり、この石があることによって鱉谷口とよばれた。「鱉」は「鼇」の異体字。元・駱天驤『類編長安志』巻七、古跡に「京兆城の南六十里、終南山に石鱉谷口在り。大なる白く円き石有り、三間の屋の如き大さにして、前後に二大石有り、当りて之を攔圧す。此を以て呼びて石鱉谷と為す。万年・長安此の谷を以て界と為す」とみえる。仇本は「石鼇先生は、杜公蓋し名を設けて以て自ら寓するなり」と述べ、石鼇老を杜甫の分身とみなす。

放神　こころをはせる。杜甫「写懐二首」其二（1264『詳注』巻二〇）にも「神を八極の外に放てば、俛仰倶に蕭瑟たり」とある。「八極」は、八方の極遠の地で、「始清之天」と意味合いが近く感じられるが、この詩は仏教についてうたわれたものである。

始清之天　道教における天上界。『雲笈七籤』巻三「道教三洞宗元」に「三天とは、清微天、禹餘天、大赤天、是れなり。天宝君、治は王清境に在り、即ち清微天なり。其の気始青なり」とある。「青」は「清」に通じている。

徐本・高本・朱本は「清」を「青」に作る。

遊目　自由にあちこちを眺めやること。屈原「離騒」（『楚辞』巻一）に「忽ち反顧して以て遊目し、将に四方を往観せんとす」とある。

浩劫之家　「浩劫」は極めて長い時間。「家」は過去から現在、未来永劫にわたり存在し続ける場。『雲笈七籤』巻三、道教三洞宗元に「三界の上、眇眇たる大羅、上に色根無く、雲層峨峨たり。唯だ元始、浩劫の家、三代の天尊なる者有るのみ。過去は元始天尊、見在は太上玉皇天尊、未来は金闕玉晨天尊」とあり、先にみた道教三洞宗元を由来とする「始青」と対応させているかにみえる。

徐本・全唐文以外、いずれも「劫」を「刼（朱本は「刦」）」に作る。

泠泠然馭乎風　軽妙に風にのる。「泠泠然」は、軽妙なさま。『荘子』逍遥遊の「夫れ列子は風を御して行き、泠然として善きなり」の郭象注に「泠然は、軽妙の貌」とある。「馭」は、朱本、仇本は「御」に作る。

熙熙然　和やかに楽しむさま。『老子』二〇章「衆人は熙熙として、太牢（＝最高のご馳走）を享くるが如く、春台に登るが如し」を踏まえる。

寒林　葉が落ちた寒々とした林。「雲林右英夫人惣楊真人許長史詩二十六首並序」〈其一八〉（『雲笈七籤』巻九八、賛頌部、詩賛辞）に「松

柏玄嶺に生じ、鬱として寒林の桀と為る」とみえる。また、陸機「歎逝賦」（『文選』巻一六）にも「寒林を歩みて以て悽惻し、春翹を翫びて思い有り」とみえ、いずれも葉を落とした冬の木々を表している。

極乎延閣　長く続いている回廊を歩いて紫微閣の最も高い場所に到達する。「極」は最も高い部分に到達する。「延閣」は窓のある回廊。長くのびつらなっている紫微閣。左思「蜀都賦」（『文選』巻四）の「陽城の延閣を結び、観榭を雲中に飛ばす。高軒を開きて以て山に臨み、綺窓を列ねて江を瞰る」の李善注に「淮南子に曰く、延閣は、棧道なり、と。高軒は堂の左右の長廊の窓有る者なり。張載の魯霊光殿賦の注に曰く、軒欄は明を開く所以なり、と」とある。

龍虎日月之君　龍君・虎君・日君・月君いずれも神々の名。「龍虎」については「斉科」（『雲笈七籤』巻三七）に「龍虎二君」がみえる。また「日月」については「老子中経下」の「第五十五神仙」（『雲笈七籤』巻一九）に神の名として「日月陰陽君」とその名が記されている。

亘疎梁　神々が梁に描かれ居並んでいる。「疎梁」は広く間隔がとられた梁。

高本は「疎」を「踈」に、仇本は「疏」に、全唐文は「竦」に作る。

鬣　長くて固いあごひげをもつもの。

皙者黝者　「皙」は白。「黝」は黒。共に仙人の肌の色を指すか。

視遇之間　一瞬眼が合う。多くの神々の中からある特定の神に注目する。

寇厳敵　外敵が厳しく刃向かい敵対する。

朱本、張本、仇本、全唐文は「嚴寇敵」に作る。この場合は「厳として敵に寇するが若し」とよむか。

四司　四人の星の神。司命・司禄・司危・司中をいう。『礼記』月令の「命有司大難。旁磔、出土牛、以送寒気」の孔穎達の疏に「石氏星経に云う、司命の二星は虚北に在り、司禄の二星は司命の北に在り、司危の二星は司禄の北に在り、司中の二星は司危の北に在り。史遷云う、四司は、鬼官の長なり」とある。

五帝天　中央、及び四方の五人の天神。太昊・炎帝・黄帝・少昊・顓頊の五帝。『周礼』春官・小宗伯の「五帝を四郊に兆す」の鄭注に「兆は、壇の営域を為す。五帝は、蒼を霊威仰と曰う。太昊焉を食す。赤を赤熛怒と曰う、炎帝焉を食す。黄を含枢紐と曰う、黄帝焉を食す。白を白招拒と曰う。少昊焉を食す。黒を汁光紀と曰う、顓頊焉を食す」とある。「兆」は祭壇を作ること。

徐本は「天」を「大」に作る。

青節　神仙の旗。「清霊真人裴君伝」（『雲笈七籤』巻一〇五）に、仙道が成就したあとの行動として「青旄の節に仗り、以て九宮に周流す」と記されている。

崇然　旗が高くそびえるさま。

緑輿　神仙のみこし。「八道秘限」の「三道秘限」（『雲笈七籤』巻五一）に「其の時太極真君・太極真人は玄景の緑轝に乗り、上りて紫微宮に詣る」とある。「轝」は「輿」に通じる。

駢然　みこしが横に連なっているさま。

仙官洎鬼官　「仙官」も「鬼官」もいずれも仙人の官職を指す。南朝梁・陶弘景『真誥』巻五に「諸仙人は、倶に是れ九宮の官僚なるのみ。真人に至りては、乃ち九宮の公卿大夫なり。仙官に上下有り、各の次秩有り」と、また晩唐・段成式『酉陽雑俎』巻二、玉格に「鬼官に七十五品有り。仙位に九太帝、二十七天君、一千二百仙官、二万四千霊司、三十二司命・三品・九品有り、七城、九階二十七位、七十二万の次第あるなり」とある。「鬼官」については、前掲「四司」の注も参照のこと。「洎」は及ぶ。

徐本・張本は「仙官」を「仙宮」に作る。

無央　数多くの。無数の。「央」は、尽きる。神々が数え切れないほどいることを表す。

陽者近、陰者遠　「陽者」は、陽の神を、「陰者」は、陰の神を指す。「思神訣」（『雲笈七籤』巻五五）に「上仙七十五将軍は、陽神なり」と、また「上霊七十五将軍は、陰神なり」といように陽の神と陰の神の名がみえている。

北闕帝君　北極星が神格化された神。太一天尊を指す。全ての神々が太一天尊に心服していることが、『北帝説豁落七元経』（『道藏』正乙部）に「北帝言う、我の位を極むるや、三十二天の総司を統べ、諸天の簿籍を綰べ、天帝は皆来りて稽首し、天下の万神は皆来りて朝謁し、万鬼千神悉く皆震伏す」とみえている。

端拱　姿勢を正して、両手をからだの前で組むこと。杜甫「往在」（0953『詳注』巻一六）に「端拱して諫諍を納れ、和風日びに沖融す」とある。「沖融」は、満ちて広がること。

於天上最貴矣　天上で最上であること。『太一救苦護身妙経』（『道藏』洞玄部本文類）には「是に於いて、天尊　老君に告げて曰く、此の聖は最も尊く最も貴く、最も聖にして最も霊なり」とあり、太一天尊が最上の神であることが示されている。「天尊」は、道教における最高神。「老君」は、北極星の神、太一天尊。

高本・張本は「於」を「于」に作る。朱本は「貴」を「尊」に作る。

〔二〕

已而左玄之屬吏、三洞弟子某進曰、經始繢事、前柱下史河東柳涉、職是樹善、損于而家、憂于而國、剝私室之匱、渴蒸人之安、志所至也。請梗槩帝君救護之慈、朝拜之功曰、若人存思我主籙生之根、死之門、我則制伏妖之興、毒之騰。凡今之人、反側未濟。柳氏、柱史也、立乎老君之後。獲隱嘿乎、忍塗炭乎。先生與道而遊、與學而遊。可上以昭太一之神威于下、下以昭柱史之告訴于上。玉京之用事也、率土之發祥也。惡乎寢而、庸詎仰而。

已にして左玄の属吏にして、三洞の弟子たる某進みて曰く、「繢事を経始せる、前の柱下史河東の柳涉は、職ら是れ善を樹て、而が家を損い、而が国を憂い、私室の匱しきを剝り、蒸人の安んずるを渇い、志の至れる所なり。請う帝君救護の慈しみ、朝拜の功を梗概して曰ん、若き人の我が生の根、死の門を主籙するを存思せば、我は則ち妖の興れる、毒の騰せるを制伏せん、と。凡そ今の人は、反側して未だ済われず。柳氏は、柱史にして、老君の後に立つ。隠嘿するを獲んや、塗炭に忍びんや。先生道と与にして遊び、学と与にして遊ぶ。上は以て太一の神威を下に昭らかにし、下は以て柱史の告訴を上に昭らかにすべし。玉京の事を用うるや、率土の祥を発するなり。悪んぞ寢んや、庸詎ぞ仰がんや」と。

やがて、左玄真人の部下で、また三洞の弟子の某氏が進みでて次のようにいう、「太一天尊の壁画を設立する事業を始め、前の柱下史であった河東出身の柳涉は、もっぱら善行をたて、自身の財をなげうち、国家を憂え、私財の蓄えを削って、民草を安心させることを強く願うほどで、その志は最上のものである。こうしたことを受けて、どうか太一天尊の人々を救いまもる慈しみ、またこのような太一天尊に参拝することの功徳について、太一天尊に代わりまとめて述べさせてほしい。このようなお人が私、太一天尊が人の生死に関する帳簿を司っていることを心にとめてさえいれば、私は、妖魔が害毒を及ぼそうとすることを抑制するだろう、と。総じて今の人々は安らかに寢られず、救われていない。柳氏は、柱下史（御史）であって、老子（太上老君）の後を継いでいる。どうして俗世から隠れて沈黙し、苦しんでいる人々を黙って見ていられようか。ひるがえって先生、石鼇の老人よ、あなたは道とともにめぐり、学問とともにめぐっている。上からは太一天尊の神々しい威信を下々に明示し、一方では、柳侍御史の訴えをお上（朝廷）に明示するべきである。帝都

で太一天尊を祭る祭祀が行われると、天下に瑞祥が現れる。どうして先生自身、柳渉のことを広めるのをやめられよう。また、沈黙したままであれば、その善行を敬慕したことになりえようか」と。

左玄之属吏　左玄真人の部下。「左玄」は左玄真人。「朝真儀」（『雲笈七籤』巻四五）に、「太上道君、九色雲霞の帔を著け、九徳の冠を戴く。左玄真人は左に在り、右玄真人は右に在り」とみえる。「属吏」は、部下。全唐文は「玄」を「元」に作る。

三洞弟子　三洞弟子とは、道教に仕える者。「三洞」は、道教における三層の教理の世界。「三洞」（『雲笈七籤』巻六）に「道門大論に云う、三洞は、洞は通を言うなり。玄に通じ妙に達せんとするに、其の統三有るが故に三洞と云う。第一に洞真、第二に洞玄、第三に洞神なり」とある。以下に、太一天尊の声を伝達しようとする属吏と弟子のことばが続く。

経始　事業をはじめる。ここでは太一天尊の壁画を描く事業。『毛詩』大雅「霊台」に「霊台を経始す、之を経し之を営す」とあり、これは祭壇を設けることを意味する。祭礼に関わる事業をはじめることをいう。

繢事　絵を描くこと。初唐・劉知幾『史通』雑説下に、「夫れ服飾を盛んにする者は珠翠を以て先と為し、繢事を工にする者は丹青を以て主と為す」とある。「丹青」は、絵を描くための赤色・青色の顔料。

柱下史　御史の美称（『史記』張丞相伝による）。もともと周・秦の官名で、老子が就いていたという。漢以降は御史といわれた。

河東　山西省永済市。柳渉の本籍。

職　もつぱら。柳渉がひたすら善行に励んだことを意味しよう。

樹善　よい行いをする。「樹」は、たてる。確立する。

損于而家、憂于而国　「損于而家」は、自身の家財を用いること。『史記』巻三八、宋微子世家に「臣 福を作し威を作し玉食する有らば、其れ而が家に害あり、而が国に凶あり」。仇本・全唐文はこの二字「于」を「於」に作る。

剝私室之匱　自身の財産を減らす。「剝」は、減らすこと。「匱」は、「櫃」に通じる。貯え。

渴　渇望する。徐本は「竭」に作り、仇本は「一作竭」と記す。

蒸人　民衆。「蒸」は、多い。蒸民、蒸庶に同じ。

梗概　概括する。

若人存思我主籙生之根、死之門　仇本は「人」を柳渉と、「我」を太一天尊と解する。深澤訳は「もし人が、私が生の根元、死への入り口をとりしきっていることをよくよく思念するならば」と訳しているように、「人」を不特定多数の人と解する。「存思」は、瞑想すること。深澤訳は「道教の術語。思いを精にし想を凝らし、内視内観する方法」と述べ、「老君存思図十八篇并序」（『雲笈七籤』巻四三）の「身を修め物に済るは、要は存思に在り。存思精ならずんば、漫瀾にして感無し」、及び『太一救苦護身妙経』の「若し衆生の、邪精鬼賊妄りに来りて傷つくる所為す有らば、但だ存思して聖号を念誦すべし、妖魅は自ずと止み、鬼賊滅亡す」を引く。「主籙」は、道教の官職の一つで、人々の生死に関する帳簿をつける役職。深澤訳は、「主籙」が道教の官職を意味していることを指摘した上で、「ここでは生死をその帳簿に記入して、人の生死を支配するといった意味だろう」と解釈し、「生の根元、死への入り口をとりしきっている」と訳す。

妖之興　妖魔が暴れまわること。

毒之騰　毒をまき散らす。危害を及ぼすこと。仇本は「此の数句は、乃ち道士の代りて帝君の語を為す」と記す。深澤訳はここまでが、道士が太一天尊のことばを概括した部分と解する。

反側　安らかに眠れない。杜甫「送韋諷上閬州録事参軍」（0770『詳注』巻一三）に「庶官割剥を務め、反側を憂うるに暇あらず」とある。官吏が税収を取り立てることに熱心で、民衆が安らかに眠れないことを気にかけるいとまもないことをいう。

未済　まだ救われていない。未済は、『易』の卦名（䷿）。『漢書』巻五六、董仲舒伝にみえる武帝の董仲舒に対する策問に、「群生遂げること寡く、黎民未済なり」とみえる。

立乎老君之後　柳渉が、かつて柱下史であった老子の跡を継いでいることを意味する。朱鶴齢注は「老君は嘗て周の柱下史為るがゆえに、柳氏今其の後を継ぐを謂う」と解する。

獲　…できる。

隠嘿　沈黙して語らないこと。だまっていること。

塗炭　極めて苦しい境遇。『尚書』仲虺之誥に、「民塗炭に墜つ」とある。どろにまみれ火に焼かれるような苦しみに見舞われること。

先生　石鼈老を指す。道士の石鼈老に対する呼びかけ。

太一　太一天尊を指す。

朱本、仇本は「一」を「乙」に作る。

于下　「于」は、朱本、仇本「於」に作る。

告訴于上　訴えをお上（朝廷）に明らかにする。

朱本、仇本は「于」を「於」に作る。

玉京之用事　都で太一神を祭る祭祀を行う。「玉京」は、都である長安。

率土之発祥　全土で瑞祥が現れる。「率土」は「率土の浜」（『毛詩』小雅「北山」）の略称。陸地のはてまで全て。転じて国土全体。「発祥」は、めでたいしるしが表れる。『毛詩』商頌「長発」の「濬哲なるかな維れ商、其の祥を長発す」による。

悪乎寝而　「悪乎」は、反語を表す。「寝」は、隠れること。

庸詎仰而　「庸詎」は、反語を表す。「仰」は、敬慕すること。尊敬し敬う。ここでは、石鼈老が沈黙している以上、決して柳渉の善行を敬慕していることにはならない、ということを意味していよう。深澤訳は「仰まん而」と訓じ、「何もせずにいられましょうか」と訳す。仇本はこの末尾の表現について「此の第二段は、設問の詞を作す。両句尾に各の而字を用うるは、毛詩の句法に效う」と記す。また底本は、『毛詩』斉風「著」の「我を著に俟つ、充耳するに素を以てせり、之を尚るに瓊華を以てせり（俟我於著乎而、充耳以素乎而、尚之以瓊華乎而）」が踏まえられていることを指摘した上で、末尾で「而」を繰り返し使うことで感歎の意を表すと述べる。

〔三〕

先生藐然若往、頽然而止曰、噫、夫鳥亂於雲、魚亂於河、獸亂於山。是罻弋鈎罟削格之智生。是機變邀退攫拾之智極。故自黄帝已下、干戈崢嶸、流血不乾、骨蔽平原、乖氣横放、淳風不返。雖書載蠻夷率服、詩稱徐方大來、許其慕中夏與。夫容成・中央氏・尊盧氏輩、結繩而已、百姓至死不相往來。茲茂德困矣。矧賢主趣之而不及、庸主聞之而不曉、浩穰崩蹙、數千古哉。至使世之仁者、蒿目而憂世之患、有是夫。今聖主誅干紀、康大業、物尚疵癘、戰争未息。必揆當世之變、日慎一日、衆之所悪與之悪、衆之所善與之善。勑有司寛政去禁、問疾薄斂、脩其土田、險其走集、以此馭賊臣悪子、自然百祥攻百異有漸。天下洶洶、何其撓哉。已登乎種種之民、舍夫啍啍之意、是巍巍乎北闕帝君者。肯不乘道腴、卷黒簿、詔北斗削死、南斗注生、與夫圓首方足、施及乎蠢蠕之蟲、肖翹之物、盡驅之更始。何病乎不得如昔在太宗之時哉。」

先生藐然として往くが若く、頽然として止りて曰く、噫、夫れ鳥は雲に乱れ、魚は河に乱れ、獣は山に乱る。是れ罻弋鈎罟削格の智の生ずればなり。是れ機変邀退攫拾の智極まればなり。故に黄帝自り已下、干戈

崢嶸として、流血乾かず、骨は平原を蔽い、乖気横放し、淳風は返らず。書は、蠻夷は率服すと載せ、詩は、徐方は大いに来たると称すと雖も、其の中夏を慕うを許さんか。夫れ容成・中央氏・尊盧氏の輩は、縄を結ぶ而已にして、百姓は死に至るまで相往来せず。茲に茂徳困まれり。矧んや賢主は之に趣かんとして及ばず、庸主は之を聞きて曉らず、浩穰の崩蹙すること、数千古なるをや。世の仁者をして、目を蒿め世の患いを憂えしむるに至るは、是れ有るかな。今聖主は干紀を誅し、大業を康んずるも、物は尚お疵癘あり、戦争未だ息まず。必ず当世の変を揆り、日に一日慎しみ、衆の悪む所は之と与に悪み、衆の善しとする所は之と与に善しとせよ。有司に勅して政を寛くし禁を去き、疾を問い斂を薄くし、其の土田を脩め、其の走集を険しくし、此れを以て賊臣悪子を馭せば、自然に百祥は百異を攻めて漸有り。天下は洶洶として、何ぞ其れ撓るるや。已に種種の民を登して、夫の惇惇の意を舎つるは、是れ巍巍乎たる北闕帝君なる者なり。肯えて道腴に乗じ、黒簿を巻き、北斗に詔して死を削り、南斗に生を注せしめ、夫の円首方足と与に、施きて蠢蠕の虫、肖翹の物に及び、尽く之を駆りて更始せしめざらんや。何ぞ昔在太宗の時の如きを得ざるを病えんや、と。

石鼈谷の老先生は、彼らを軽視して立ち去るかのようであったが、体をくずしてとどまって次のように語った。「ああ、そもそも鳥が雲に乱れ飛び、魚が河中で乱れ泳ぎ、けものが山の中に乱れ逃れようとするのは、鳥を捕まえるための網やいぐるみ、つりばりや漁網、木の柵といった知恵によるものであって、また器具、弓と矢、つかみ取る方法などの知識がきわまったことによっている。そのため黄帝の御代以降、いくさが盛んになって、兵士の血が流れて乾くことなく、その骨が平原をおおうほどで、邪気があちこちにひろがり、純朴な風気に回帰することはなかった。『尚書』は「異民族が服従した」と記し、『毛詩』は「異民族の国の人々が多くやってきた」と記すが、彼らが中華に親しむことを許したわけではなかろう。そもそも理想的な太古の天子である容成氏・中央氏・尊盧氏といった人々のころ、民は縄をゆって互いに伝達し合うだけであった。人々は死ぬまで往来することがなかった。古の天子の豊かな徳はこのようにこの上ないものに達していたであった。ただ、その時代より後に関しては、賢明な君主が太古の理想に向かおうとしても及ばないし、凡庸な君主であればこのような話を聞いても理解できなかったのであるから、これまで民衆が崩壊してどうにもならない状況に陥ってしまい、それが数千年も続いてしまうのは当然のことである。世の仁義ある人が、遠く理想を求め世の患いを憂えるようになったのは、このような理由によっているのである。現在の尊い皇帝陛下が法規を守らぬ者を誅伐し、国家の大業を盛んにされたが、あらゆることにまだ災禍がのこり、戦が止んでいない。必ずや陛下がこの世の異常な出来事を推し量り、日一日と慎み、大衆が悪むことを悪み、大衆が善とすることをを善とするべきである。臣下に命令して政を寛容にし禁止をとりのぞき、庶民の病状を気にかけ租税を軽くし、田畑をととのえ、辺境のとりでの守りを固くし、このようにして賊臣や軽率な若者を手なずけ統治すれば、おのずから多くの幸いが多くの災いを徐々に除いていくであろう。いま天下はぐらぐらと不安定な状態であり、なんと乱れていることだろうか。純朴な民草を天上の名簿に登記し、かのくどくどとした考えを捨てさせたのは、偉大なる北闕帝君（＝太一天尊）にほかにない。この君は道教の真髄にのっとり、死から免れない人々の名簿を巻いてご破算にし、部下の北斗には死を削らせ、南斗には生にふりかえさせる。その恵みは、かの丸い頭と四角い足をもつ人間だけではなく、地をはう虫や羽をもった虫にも施されるから、全てが太古の御代に回帰することができるだろう。そうであるから、いったいなぜ、かつて太宗の貞観の治世のようにできない、ということを悩む必要があろうか」と。

藐然若往　軽視して立ち去ろうとする。「藐然」は、軽視するさま。三洞の弟子の某氏の問いかけを軽んじている様子をいう。例えば、『抱朴子』暢玄に「藐然として流俗の誉れを喜ばず」とあるように、俗物を軽視する際に用いられている。「藐然」は、深遠なさまも意味するが、その場合は、弟子を気にかけることもなく遠くに行こうとすることを意味しよう。

朱本は「若」を「而」に作り「一作若」と記し、仇本は「一作而」と記す。

頽然　姿勢をくずすさま。李白「春日酔起言志」（『全唐詩』巻一八二）に「所以に終日酔い、頽然として前楹に臥す」とあるように、体をくずした状態を表す。

夫鳥乱於雲、魚乱於河、獣乱於山…　鳥、魚、獣がそれぞれのすみかに安住できないのは、人が彼らを捉えるため道具を手に入れたことが原因になっていることをいう。『荘子』胠篋の「夫れ弓弩・畢弋・機変の知多ければ、則ち鳥上に乱る。鉤餌・罔罟・罾笱の知多ければ、則ち魚水に乱る。削格・羅落・罝罘の知多ければ、則ち獣沢に乱る」を踏まえた表現。

徐本、張本は「於」を「于」に作る。高本は「河」を「山」に作り、朱本、仇本は「水」に作る。また仇本は「一作河」と記す。徐本は「於河獣亂於山」の六字を欠く。高本、朱本、張本は「獣亂於山」の四字を欠く。

畢弋　鳥を捕らえるための道具。「畢」は網の一種。「弋」は、糸のついた矢。

鉤罟　魚を捕らえるための釣り針と網。

銭本、全唐文は「鉤」を「釣」に作り、朱本、張本は「鉤」に作る。

削格　木の枝を削って柵のように並べて、獣を追い込み生けどるためのしかけ。

機変　器具。からくりで動くものしかけ。

高本は「變」を「変」に作る。

邀退　弓と矢を言うか。底本は高本、朱本、仇本が「繳射」に作ることを指摘した上で、『孟子』告子上の「一心には鴻鵠有りて将に至らんとすと以為いて、弓繳を援きて之を射んことを思う」を引く。

攫拾　つかみとること。「削格」「羅落」「罝罘」といったもので獣を生け捕りにすることを意味しよう。

干戈崢嶸　いくさが盛んであること。「干戈」は、戦争、兵戈。「崢嶸」は、さかんなさま。

平原　張本は「平」を「乎」に作る。

乖気横放　不吉な気配が広がり拡散している。「乖気」は不吉な気。『晋書』巻二七、五行志上に「君其の道に違えば、小人位に在り、衆庶常を失えば、則ち乖気応じ、咎徴效ありて、国以て亡ぶ」とあるように、国家の存亡に関わる際に用いられる。「横放」は、広がっていくこと。

淳風　純朴な風気。黄帝以前の争いのない理想的な世界の風土をいう。『抱朴子』逸民に「淳風は以て百代の穢を濯ぐに足り、高操は以て将来の濁りを激るに足る」とある。

書載蠻夷率服　「書」は『尚書』。「蠻夷率服」は、異民族が中華に服従したことをいう。「蠻夷率服」が、『尚書』舜典にみえることをいう。「率服」は、服従すること。

銭本、朱本は「夷」を伏せ字にしている。

詩称徐方大来　「詩」は『毛詩』。「徐方大来」は、異民族の人びとが中華に大挙してきたことをいう。『毛詩』大雅「常武」の「王猶お允に塞てり、徐方既に来れり。徐方既に同じぬ、天子の功」を踏まえる。「徐方」は、淮北に位置した異民族の国名。

中夏　中国のこと。後漢、班固「東都賦」（『文選』巻一）に「中夏を目て徳を布き、四裔を瞰て稜を抗ぐ」とあるように、異民族と中華を対比するとき用いられる。異民族を服従させることが議論されていることについて、深澤訳は「あるいは粛宗が安史の乱をしずめるためにウィ

グル族の援兵をもとめたことに対する杜甫の不満「花門を留む」(0267『詳注』巻七）の詩にのべるような懸念を表すものかもしれない」と述べている。

仇本は「夏」を「華」に作る。

容成・中央氏・尊盧氏輩、結縄而已　太古の理想的な時代を表す。「容成・中央氏・尊盧氏」はいずれも太古の理想の天子の名で、『荘子』胠篋に「子独り至徳の世を知らざるか。昔者容成氏・大庭氏・伯皇氏・中央氏・栗陸氏・驪畜氏・軒轅氏・赫胥氏・尊盧氏・祝融氏・伏犠氏・神農氏あり。是の時に当りてや、民縄を結びて之を用う」とみえる。「結縄」は、上古の文字の無かった時代、縄を結んで約束のしるしにしたこと。転じて、上代の理想的な政治を意味する。『周易』繫辞伝に「上古は縄を結びて治む」とある。

朱本、張本、仇本は、「容成」のあとに「氏」の字が有る。朱本、仇本は、「尊盧氏」の下に「一本無此三字」と記す。

茂徳困　すぐれて立派な徳が最上に達している。「茂徳」は、すぐれて立派な徳。『左伝』宣公十二年に「狄に五罪有り……其の俊才に怙（たの）みて茂徳を以てせず」とある。「困」は、きわまること。『国語』巻二一、越語下「日困まりて還り、月盈ちて匡（か）く」の韋昭注に「困は、窮なり」とある。

仇本は「困」を「囷」に作り、「旧本作困。朱言改作囷、即古淵字」と記す。ただ現行の朱本は、本文が「困」に見え、この校勘も記されていない。

趣　太古の理想の天子のような政治に回帰すること。

庸主　凡庸な君主。杜甫「行次昭陵」(0189『詳注』巻五）にも「旧俗庸主に疲れ、群雄独夫を問う」と用いられている。「旧俗」は前代の王朝の人びと。杜甫のこの文では「浩穰」が同様の意味で用いられていよう。「独夫」は、民の信頼を失った男。煬帝を指す。

浩穰　多いこと。ここでは多くの人びとを意味する。

崩蹙　崩壊し、どうにもならない状況に追い詰められること。

蒿目而憂世之患　遠くを見やり世の中の患いに対して憂える。「蒿目」は、遠くを見やること。『荘子』駢拇（べんぼ）の「今世の仁人は、蒿目して世の患いを憂う」に由来することば。仇本は「仁者世を憂うは、柳渉を指す」という。

干紀　法令を犯す。ここではそれをした逆臣。後漢・潘勗「冊魏公九錫文」（『文選』巻三四）に「関を犯し紀を干せば、誅殛（ちゅうきょく）せざるは莫し」とある。

疵癘　わざわいをうける。災禍にあう。原義は病気。『荘子』逍遥遊に、「其の神凝れば、物をして疵癘せしめず、年穀をして熟せしむ」とある。『荘子』は、姑射山にすむ神人が、人を病気にさせないことをいう。

揆当世之変　この世の異常な出来事を推し量る。「揆」は、推し量る。

錢本は「世」を「時」に作る。

勅有司　臣下に命令する。「有司」は、役人。皇帝の臣下。担当があるものの意で、『尚書』大禹謨による語句。

錢本、朱本、仇本、全唐文は「勅」を「勅」に作る。

薄斂　「薄斂」は、租税を軽くすること。『左伝』昭公二十年「公説（よろこ）び、有司をして政を寛（ゆる）くし、関を毀（こぼ）ち、禁を去り、斂を薄くして、責を已（や）めしむ」を踏まえた語句。杜甫「同元使君春陵行」(1154『詳注』巻一九）にも「悽惻して誅求を念い、斂を薄くすれば休明に近し」とみえる。「悽惻」は、心をいためること。「誅求」は、厳しく税をとりたてること。「休明」は、よく治まること。太平。

徐本、高本、錢本、朱本、張本は「斂」を「歛」に作る。

脩其土田、険其走集　田畑をととのえ、辺境のとりでの守りを固くする。「土田」は、はたけ。田地。「走集」は、辺境のとりで。有事に兵卒が急いで集まることによる。これは『左伝』昭公二三年の「其の土田を修め、其の走集を険にす」を踏まえる。

高本、銭本、朱本、張本、仇本、全唐文は「脩」を「修」に作る。

悪子　品行が劣悪な若者。杜甫「荆南兵馬使太常卿趙公大食刀」(1056『詳注』巻一八)にも、「賊臣悪子紀を干すを休めよ、魑魅魍魎　徒らに為すのみ」とみえる。

朱本は「一作愚」と、仇本は「一作愚子」と記す。

百祥　多くの瑞祥。『尚書』伊訓に、「善を作さば、之に百祥を降し、不善を作さば、之に百殃を降す」とあるように善行を積むことでもたらされる幸福。杜甫「奉同郭給事湯東霊湫作」(0131『詳注』巻四)にも「百祥、盛明に奔り、古先能く儔する莫し」と用いられている。「盛明」は、盛んで明らかな聖なる天子の御代。「儔」は、匹敵すること。

百異　多くの災害と異変。『漢書』巻三六、劉向伝に「百異消滅して、衆祥並びに至る」とある。

有漸　だんだんとよくなる。『易』の卦名(䷴)でもあり、正しい順序を踏み、事を順々にすすめてよくなるさまを表す。

洶洶　揺れて不安定であるさま。『三国志』巻九、魏志、曹爽伝に「天下洶洶として、人危懼を懐うも、陛下但だ寄坐を為すのみなれば、豈に久安を得んや」とあるように天下が不安定であることを意味する。

撓　乱れること。

已登乎種種之民、舍夫惇惇之意　純朴な民草を天上の名簿に登記し、かのくどくどとした考えを捨てさせる。「種種」は、純朴さ。「惇惇」は、くどくどと人を説き伏せること。『荘子』胠篋の「夫の種種の民を舎てて夫の役役の佞を悦び、夫の恬淡無為を釈てて夫の惇惇の意を悦ぶ。惇惇已に天下を乱す」を踏まえる。

巍巍乎　崇高で偉大なさま。『論語』泰伯に「巍巍たるかな、舜禹の天下を有てるや、而して与らず」とあるように、人の偉大さを表す場合に用いられる。

道腴　学説の精髄。ここでは、道家のそれを意味する。班固「答賓戯」(『文選』巻四五)に「愼しんで志す所を修め、爾の天符を守り、命に委ねて己を供うし、道の腴を味わう」とあり、その李善注所引項岱注に「腴は、道の美なる者なり」とある。

黒簿　罪人の名簿。深澤訳は「罪が重くて死ぬように決められた者を記入する天界の名簿」と述べ、「説魂魄」(『雲笈七籤』巻五四)の、「色欲に厚ければ則ち精華竭き、精華竭きれば則ち名黒簿に生ず。鬼録罪著らかにして、死将に至らんとす」という記述などを引く。この語句は杜甫「朝献上清宮賦」にも、天師張道陵らが衆生済度を示すものとして「手中の黒簿を裂き、堂下の金鐘を睨む」とみえている。

北斗削死、南斗注生　この句は『搜神記』巻三「管駱」の「北辺に坐す人は是れ北斗、南辺に坐す人は是れ南斗。南斗は生を注し、北斗は死を主る。凡そ人受胎すれば、皆な南斗従り北斗を過ぐ。所有祈求は、皆北斗に向う」を踏まえる。「北斗」も「南斗」も神名で太一天尊の部下にあたる。「総説星」(『雲笈七籤』巻二四)に、太一天尊の部下の名として「北斗君　字君時、一に字は充。北斗神君は本江夏の人、姓は伯、名は大万」、「南斗神君、字は流時、南斗、字は君元。南斗君は是れ河東の人、姓は趙、名は赦先、字は君遷」とそれぞれみえる。

円首方足　人を指す。『大戴礼』曾子天円の「曾子曰く、天の生む所首を上にし、地の生む所首を下にす。首を上にするを之れを円と謂い、首を下にするを之れを方と謂う」による。

蠢蠕之蟲、肖翹之物　地をはう昆虫と羽のある昆虫。『荘子』胠篋の「惴耎の蟲、肖翹の物、其の性を失わざるは莫し」を踏まえる。成玄英の疏は「地に附する徒を惴耎と曰い、空を飛ぶ類を肖翹と曰う、皆軽く小さき物なり」と記す。

駆之更始　古いものから新しいものへと駆り立てる。「更始」は、旧式を取り除き新しいものに改めること。『礼記』月令には、「数将に終りに幾からんとし、歳且に更に始まらんとす」とあるように、年が改ま

る際に用いられている。

何病乎　徐本は「乎」を「予」に作る。

太宗之時　初唐の太宗李世民の御代。貞観年間の太平であった治世。太宗の御代を讃えた例として、杜甫「北征」（0188『詳注』巻五）の「煌煌たる太宗の業、樹立甚だ宏達なり」が挙げられる。「太宗の業」とは唐王朝を樹立したことを意味する。

〔四〕

石鼈老畢辭、三洞弟子某又某、靜如得、動如失、久而却走、不敢貳問。

石鼈老辞を畢うるや、三洞の弟子の某又た某は、静かなること得るが如く、動けること失うが如く、久しくして却走し、敢えて弐問せず。

石鼈谷の年老いた住人がことばを終えると、三洞のある弟子、またとある弟子は、おしだまって納得したようであり、動いても茫然としているようで、その後しばらくしてから退散して、二度と質問をしようとはしなかった。

畢辞　朱本、仇本は「辭畢」に作る。

静如得…　深澤訳は、この部分が『荘子』天道にみえる「虚なれば則ち静、静なれば則ち動、動なれば則ち得」が踏まえられている可能性を示唆する。

却走　しりぞき退散する。杜甫「李鄠縣丈人胡馬行」（0246『詳注』巻六）では、「鞭を回らして却走して天子に見ゆ、朝に漢水に飲い暮れには霊州」というように、馬を使って急いで引き返す際に「却走」が用いられている。

貳問　繰り返し質問すること。「貳」は「二」と同じく繰り返すこと。

【鑑賞】動き出す壁画――ことばによる動画

「前殿中侍御史柳公紫微仙閣画太一天尊図文」は、冒頭に示したように、大きく四段からなっている。第一段落では、石鼈老による紫微仙閣に描かれた、太一天尊の壁画の紹介である。第二段落では、石鼈老に語りかける三洞弟子のことばが記され、第三段落は石鼈老の道士に対する考えが示され、第四段落では、石鼈老の意見に納得せざるを得ず三洞弟子が立ち去る姿が描かれる。

この文は「前殿中侍御史柳公紫微仙閣画太一天尊図文」（以下「紫微仙閣画太一天尊図文」と略称）と題しながら、壁画自体を描いたのは第一段落に限られ、ほとんどが道士と石鼈老の問答に占められている。その内容も壁画についてではなく、壁画を作らせた柳渉のすぐれた人柄や、万民を救う太一天尊の偉大さを描くことが中心となっている。

先にみてきたように道士のことばや石鼈老のことばの中には、『雲笈七籤』などに含まれる道教に関連する用語や、『荘子』や『老子』といった道家に関連する用語が多用されており、これらは道教や道家に対する杜甫の造詣の深さを裏付ける。内容の偏りからすれば、この文を通して考えるべき事柄は、杜甫と道教との関わりを考えることに重点が置かれるのが自然だろう。実際、深澤一幸「杜甫における道教（下）」では、この文を通して杜甫の道教観について論じており、深澤一幸「杜甫における道教（上）」（『言語文化研究』一六号、一九九〇年）は、「望岳」（0002・0230・1394『詳注』巻一・六・二二）、「贈李白」（0019・0024『詳注』巻一）、「三大礼賦」、「冬日洛城北謁玄元皇帝廟」（0038『詳注』巻二）を取り上げ、杜甫の道教に対する考えをまとめている。なお、「冬日洛城北謁玄元皇帝廟」には、「廟に呉道士の画ける五聖の図有り」という原注がある。その絵画の出来映えを称えている点は、「紫微仙閣画太一天尊図文」に共通している。

「紫微仙閣画太一天尊図文」は、壁画に関する記述に重点が置かれていないため、タカやハヤブサの絵を主にうたった「画鷹」(0011『詳注』巻一)・「画鶻行」(0223『詳注』巻六)や、白鹿毛の馬をうたった「天育驃図歌」(0124『詳注』巻四)などとは趣を異にする。これが「文」であって「詩」ではないことを踏まえると、こうした描き方の違いは、文体によるとも考えられるのかもしれない。

ただ、「詩」であっても絵から着想を得て、想像を膨らませた事柄を述べたものも確認できる。例えば「題李尊師松樹障子歌」(0215『詳注』巻四)は、道士が持参した松を描いた屏風から着想をえて描かれた詩であるが、この中には「老夫生平奇古を好み、此に対して興 精霊と聚(あつ)まる」というように、まるで杜甫が絵画の中に入っているかような描き方がされている。興味深いのは、詩末に「悵望聊か歌う紫芝の曲、時危くして慘澹として悲風来る」と記されていることである。杜甫はこの絵から風が吹いているかのように感じている。絵は静止画であるが、それがまるで風が吹き動いているかのように杜甫は感じているのである。大げさないいかたをすれば、杜甫にとってこれはすでに静止画ではなく、動画のように感じられていると考えられる。

「紫微仙閣画太一天尊図文」においても、壁画の神々が動いているかのように描かれていることに気がつく。「伊の四司五帝天の徒は、青節崇然たり、緑輿騈然たり。仙官より鬼官に洎び、無央数の衆あり。陽は近く、陰は遠し」は、多くの神々が遠近法を用いて描かれ、彼らがうごめいてるかのように錯覚させられる。また「倶に空に浮びて定まらず、目の向う所は一なるが如し」は、神々が空中に浮かび一定していないことをいう。杜甫にとって、この壁画の神々が動いているかのように受け止められていることについては、注意に値するのではなかろうか。

壁画が単なる静止画として受け止められていないようにみえるこの描写は、後の道士の口を借りて自ら語る「若(かくのごと)き人の我が生の根、死の門を主籙するを存思せば、我は則ち妖の興れる、毒の騰せるを制伏せん」という太一天尊のことばや、石鼈老のいう「道腴に乗り、黒簿を巻き、北斗に詔して死を削り、南斗に生を注せし」む、といった太一天尊のふるまいを自然に導いているように思われる。

興膳宏「杜甫の書論—ことに同時代批評の視点から—」(『書学書道史研究』二六号、二〇〇六年)が「杜甫の持ち前である審美感覚が、「骨立」「瘦硬」への強い共鳴を示していたこともまた確かである」と指摘するように、確かに絵画を描いた杜甫の詩には、鋭いものを好むという杜甫自身の嗜好が表現されてもいる。しかし、こうした審美感覚だけが、杜甫の詩文の全てに一貫しているわけではないだろう。「紫微仙閣画太一天尊図文」のように、画そのものを直接評価するのではなく、画そのものが想像を喚起させる力を持っていることを示すことで、画の巧みさを間接的に表す文章が、杜甫の作中に確かにあることを、この文は物語っていよう。

附記：本稿は JSPS 科研費 JP21K00321・JP19H01230 の助成を受けたものである。

(北海道教育大学旭川校教授)